

第4部 Jリーグの基礎を作る



初の外人選手の確保で苦勞

石田金次郎（昭和40年卒業）

英会話の先生兼務で公募

昭和22年に住友金属の同好会として発足した住友金属蹴球団は、昭和31年には会社を代表するスポーツ団体として活動するようになりました。49年には日本リーグ2部に昇格し、これを機に活動拠点を大阪から鹿島に移し、1部への昇格を目指していきました。58年度には日本リーグ1部の日立製作所との入れ替え戦に臨みましたが、敗退して1部への昇格は果たせませんでした。しかし、昭和59年度に日本リーグ2部で優勝し、初めて念願の日本リーグ1部への昇格を果たしました。

当然、チーム力の強化が昇格したチームの大きな課題となり、日本リーグ2部時代に、リーグ運営委員やリーグの常任幹事などをしていた私に、団からチーム力強化のために外人を補強したいという話が持ちかけられ、案として鹿島製鉄所の英会話の講師としてサッカーの出来る人を採用したらとの話が出てきました。

この話を受けて、当時ロンドンの運輸省の出先

機関である観光局に、東大サッカー部同期の新井俊一君が行っていましたので、さっそく事情を説明して相談しました。彼はロンドンで、ロンドン在住の日本人のサッカーチームを組織していて、そのチームの名誉顧問にレスリー・テラーさんという人を据えていました（当時、テラーさんはイングランド・アマチュア・クラブのミドルセックスワンダラーズ顧問をしていました）。新井君はテラーさんに相談を持ちかけるなど、選手獲得のための具体的協力を約束してくれました。

「英会話講師が出来て、サッカーの指導も出来る人を募集」という広告をイギリスの新聞に出して、応募してきた人物をテラーさんが住友金属の駐在事務所で面接をするというスキームを進めることとし、当時住友金属のロンドン事務所にいた安藤幹雄君とも連絡を取って、採用活動を始めました。何人かの応募者が来ましたが、面接したテラーさんの薦めもあって、最終的にはヘンリー・ディビット・ウェイトなる選手を採用しました。途中で岡野俊一郎さんに我々の事情を伝えるとともに、テラーさんの人物評価をお伺いし



サッカーマガジン11月号（1985年）より
日産一住金（1985年9月6日横浜三ツ沢）

たところ、大丈夫との太鼓判をいただけただので、会社にその旨を説明し、会社採用の論拠としました。

当時、私は営業課長をしていたので、仕事で遅くなることが多く、家に帰ると真夜中のロンドンと東京の連絡で、長い国際電話のやりとりをしていたのを思い出します。

アマチュア資格でひともめ

ヘンリー・ディビット・ウェイトが来日する間際になって、協会から、彼はコンタクトプレーヤーなので、従ってプロであるから不可と判断されて、来日が2週間ずれました。たまたま三菱重工ロンドンにいた京大卒の伊藤君が帰国しているという情報を新井君からもらい、伊藤君から「コンタクトプレーヤーはクラブから交通費が出るだけの選手である」とのありがたい助言の助太刀をもらって協会にご理解をいただき、当時平木さんだっただけだと思いましたが、アマとして認めていただきました。

彼は背が2m超で、ガリバーというあだ名がつけられましたが、住友金属チームのセンターバックとして長い足を武器に、守備の要として活躍してくれました。大いに、新聞のスポーツ欄を賑わしたことを覚えています。

生活面では、彼は当時でいうシティ・ボーイで、鹿島の田舎はあまり気に入らなかったとみえ、よく東京に出てきては、我々と赤坂あたりでビールを飲んで歓談したりしていました。また、鹿島ではジャンボな彼が町に現れると、みんな家に引こんで姿が見えなくなるなどという冗談ともつかない話をしていたのを思い出します。彼の日本での保証人には、日本ロレックス社のマクドナルド社長になっていただきましたが、時折、鹿島や東京での試合を見に来られたこともありました。

このシーズンは残念ながら6勝13敗3分けの11位で、この年から1部リーグの下位2チームは2部リーグの上位2チームと自動的入れ替えになり、1部リーグから2部に降格となってしまいました。

今では、外人選手は当たり前となっていますが、

当時はアマチュアであることが前提で、外人選手はほとんどいなかったように思いますし、初めての外人選手の加入で、その世話に気を遣ったことを覚えています。

昭和62年度には直ぐ1部リーグへ復帰しましたが、1部、2部の間を行ったり来たりするような状況でした。しかしそれまでの諸々の蓄積した経験を生かし、Jリーグへの参加、ジーコの加入などの戦力強化を図り、鹿島アントラーズとして衣替えした結果、Jリーグが開幕すると前期優勝するまでになったのはご承知のことと思います。

地域の支援でJリーグをめざす

鹿島アントラーズの誕生は平成3年ですが、その経緯といわれていることを少し述べます。平成2年に三つの出来事があって、関係者が努力し、その結果が良い方向に動いたことであると理解しています。鹿島アントラーズのJリーグ入りは、それまでの多くのJリーグチームの設立プロセスとは違って、官民一体となった地域ぐるみの取り組みの成果であるといえると思います。

一つ目は、住友金属に於いて、平成2年に2000年ビジョンなるものが策定され、社員の提言の中に「地域に貢献する企業になろう！」という提案がありました。社員、家族がその地域に住んで良かったといえるような地域にしたいという想い、動機があったということです。

二つ目は、茨城県と鹿島3町が平成2年に「楽しい街づくり懇談会」と称する地域活性化のための会をスタートさせていたということです。

鹿島は半農半漁の過疎地帯で、かつて陸の孤島といわれていましたが、昭和30年代後半に本格化した重化学工業化の波に乗って、臨海工業地帯を形成する鹿島総合開発が進められたところです。進出企業が150社に及んでいたものの、都市基盤、特に生活・文化基盤の遅れや企業関係者と地元住民との融合の遅れ、若者の都市圏への流出、進出企業の雇用難などの問題を抱えていました。鹿島の新しい時代にふさわしい姿を模索、苦闘して、茨城県や鹿島町などの行政はポスト鹿島

開発時代の鹿島地域活性化の方途を探るべく、平成2年には「楽しい街づくり懇談会」(座長:木村尚三郎東大名誉教授=故人)を発足させていました。

三つ目は、地域に根ざしたクラブ作りを目標とするプロサッカーの話が出てきました。平成2年4月に日本サッカー協会から住友金属に対して、プロサッカー参加の打診があったことです。住友金属は、トップマネジメント・レベルでプロ参加を決議しました。

官民一体の取り組み

住友金属のプロリーグ加盟については、すでに、いろいろなメディアを通じてご存じかと思いますが、プロサッカーリーグへの打診があったとはいえ、住友金属のプロサッカーリーグへの加入については、川淵三郎さんが99.999%駄目で、加入できる確率は0.001%であったと仰っているとおり、他チームに比べホームタウンとなる地域人口が少ないこと、チームは必ずしも強くないこと、しかも競技場がないという状況であり、それらはプロサッカーリーグへの加入条件を満たすには大変高いハードルとなっていました。

そこで加入条件をクリアするために、官民一体となつての取り組みが始まったのです。

集客力については、楽しい街づくりを目指して、サッカーによる町おこしを実現するという観点から、鹿島を中心に車で30分圏内の市町村長、教育長、企業、労働組合、諸団体の「鹿島で試合があれば、こぞって応援に行きます」という支援文書を取り付けて提出しました。

チーム力の強化には、ジーコ・サイドから「お金のためではなく、サッカーで名をなした者の責任として、これから強くなろうとしている国やチームに自分の経験してきたことを還元したい」「町おこしにサッカーを据えた鹿島プロジェクトに興味がある」という申し入れがあり、サッカーの伝道師といわれるスーパースター・ジーコの入団が実現しました。茨城県出身の宮本征勝監督をスカウトし、幾つかの有力チームから主力選手を

譲ってもらい、気合いを入れて戦力強化を図りました。

スタジアムについては、「楽しい街づくり懇談会」も広域的な取り組みを支援し、当時の茨城県・竹内知事の理解を得、「鶴の一声」でわが国初のサッカー専用の屋根付きスタジアム「県立カシマサッカースタジアム(1万5千人収容可能)」の実現にこぎ着けたなどであります。

地域おこしのお手本

こうした大勢の方の支援と努力が実り、平成3年にはプロ・サッカー・リーグへの加入が認められ、「企業ではなく地域のチームとして出てくる彼らは、我々が目指すプロリーグの理想ではないか」という最上級の賛辞が添えられたのを思い出します。

いよいよ平成5年にはJリーグの第1ステージが開幕し、鹿島アントラーズは優勝しました。「サッカーで街が変わった!」と言われました。行政の「楽しい街づくり」と企業の「地域貢献」の融合も進みました。鹿島アントラーズは地域と一体化し、サッカーによる地域おこしは着実に実を結んでいきました。

試合のたびに会場の警備、チケットのもぎり、観客の誘導などの面で大勢のスポーツ・ボランティアの支援を受け、地域社会に溶け込み、地域に根ざしたスポーツとして定着してきています。そして郷土の誇りともなり、ワールドカップ開催地として鹿島の名を世界にも発信し、国際的にも知られることになりました。すでにJリーグが始まってから15年経ちますが、サッカーでの地域おこしの一つのお手本として、官民一体となつた町おこしが日本のあちらこちらで進められているのではないかと思います。

想えば、東大時代にア式蹴球部に身を置いて、世界的スポーツのサッカーをかいま見て、また、多くの諸先輩や同輩の警咳に接して鍛えられ、岡野先輩からは「これからはスポーツ先進国の例にならない、日本は学校体育や企業体育から社会体育に社会システムを切り替えていかなければいけな

い」という方向を示唆していただきましたが、時代の方向は正にその方向に向けて動いていると思う昨今です。外人スカウトの苦勞もその流れの中でお役に立ったのではないかと考えています。

そして私が住友金属にお世話になったのは、大先輩のベルリンオリンピック代表の故種田孝一氏

ならびに名ゴールキーパーの吉富裕氏のお陰です。住友金属蹴球団での活動にもご尽力いただいたことを考えますと、東大ア式蹴球部との縁は大変深く、かつまた、その恩恵を受けてきたことに感謝しております。今後ともサッカーとの縁は大切にしたいと思っています。

Jリーグの基礎を作る②日産自動車サッカー部→横浜マリノス

素人監督、ドタバタ奮闘記！

安達二郎（昭和39年卒業）

サッカー部員のストライキ

昭和47年5月のある日、サッカー部員のいる寮の管理人から予期せぬ電話が入った。

「若いサッカー部員たちが会社に行かずブラブラして、練習にも行かないと言っている。何か雰囲気がおかしいからすぐ来て欲しい」

いやな胸騒ぎを感じながら急いで駆けつてみると、案の定、ニキビ面の部員たちが私の目を避けるようにして、所在なげに食堂あたりをうろついていた。

「話を聞こう、一人ずつおれと話そう」。そう声を掛けて、田舎の高校を出てきたばかりの18歳の少年たちとの、いつ終わるとも知れない対話が6畳の薄汚い寮の一室で始まった。

時間が経つのは早かった。いつの間にか夕暮れから夜になり、天井からぶら下がる蛍光灯の白い紐を下に引いて電気をつけた。蛍光灯がぶらりと揺れた。

食べものを口にする時間も惜しんで、何時間も、ただひたすら話を聞いた。最後にY君が入ってきたとき、彼はこう言った。「監督、もう分かりました。明日から皆ちゃんと会社に行きますから」

こうしてあっけなくストライキもどきの騒動は

幕を閉じた。

ゼロからの出発

銀座にある日産自動車の人事部厚生課長に呼ばれて、「安達君、日本リーグに入れるようなサッカー部を作ってみないか、会社の方針だ」。こう言われたのはチームが発足するわずか10カ月前のことだった。本社人事部門にいた同期の小川君も同席していた。

当時、日産には都市対抗戦を戦う野球部はあったが、通年で応援できるスポーツは何もなかった。

「ラグビー、バレー、サッカー、どれか一つ選んで強化するように」という役員会の指示を受けて厚生課長が動いたのだ。ちょうどそのころ、日産にはラグビーやバレーに熱心に取り組む人は見当たらず、たまたま私が横浜事業所勤務でプライベートに工場対抗サッカー大会を初めて企画し、厚生課に交通費の面倒を見て欲しいなどお願いに行ったりしていた。グラウンドは横浜にあり、私は同じ横浜事業所勤務だったので、会社は何かと都合良かったのだろう。そんな上司の下心も知らずに夜は銀座に誘われ、飲んで酔って、そして運命は決まってしまった。新婚わずか1年後、横浜マリノス誕生の22年前の出来事である。

さてどうしたものかと、まずは竹腰重丸大先輩の門を叩いて心得をうかがった。竹腰先輩はおもむろにこう仰せられた。「人材は広く募り、偏らないこと。チームの核となる人材は技術より人柄で選ぶこと。頭でっかちの大卒チームを作らぬこと」。私はこの教えを忠実に守った。しかしその分、安易な妥協は許されず、そこから想像を超える難行苦行のドタバタ劇が始まるのであった。

大卒の一人は浦和出身の縁で立教の主将鈴木保君（元日本女子代表監督）に決まったが、もう一人は教育大卒の男で、得点力が高い選手だったが、学生結婚する、しないの難しい条件付きだった。高卒選手の採用の時には入社案内と会社のパンフレットをかばんに詰め込み、静岡を皮切りに西は福岡、北は北海道まで行脚した。サッカーの話は資料などあるはずもなく、すべて私の口頭での説明で賄った。

国体の東北予選が山形で開かれる話を耳にしたときは夜行列車に飛び乗った。通路に新聞を敷き夜行列車に揺られながら朝5時に山形駅に着き、腹ごしらえと身支度を整えて市役所に向かった。担当者に試合のスケジュール、選手の宿泊所を聞き出すためである。名刺渡し、練習場巡り、差し入れ。新参の素人が出来ることは何でもやった。恥も外聞も関係なかった。

最初「日産サッカー部、そんなのあるの？聞いたことない」と無視され続けたが、そのうちに本音もポロリと聞けるようになった。「今までどれだけの会社がサッカー強化と言ってきたことか、でも中途半端で終わる会社があまりにも多いのでね……」。日立が東北遠征に出ると聞けば同行し、高橋監督のおこぼれをありがたく頂戴したこともある。

屈辱を感じたりする暇もなく東奔西走するうちに、どうにか1チーム分の選手を手当てできる目途が立ってきた。

これに工場チームにいた日産の養成学校OBの数名を中堅としてメンバーに加えた。

マネジャー、コーチ兼務で

物置を改造して壁に釘を打ちつけただけの即席の部室を作り、真新しいゴールネットとボールを買い入れ、昭和47年4月1日、部員18名（うち大卒2名）の日産自動車サッカー部が誕生した。笑うなかれ、色白で眼鏡をかけた、どこから見てもそうは見えないホヤホヤの素人の私が初代監督に就いた。マネジャーになれる人材など社内にいるはずもなく、マネジャー、コーチを兼務してのスタートとなった。

幸い公式グラウンドはあったが、工場の行事、近隣への開放などとの折り合いが必要で、工場の厚生担当に三拝九拝したが、面倒なのでサッカーのサの字も知らないこの小うるさい担当者を、のちにマネジャーにしてしまった。

チーム発足の夜は、部員を会社の社員クラブに招いて夕食会を開いた。挨拶の後「頂きます」と言って食べ始めたが、見ると若い連中がもじもじして戸惑っている。「食べてもいいんだぞ、なに遠慮してるんだ？」と聞くと、うつむきながら「これ、どうやって食うんか、分かんねえす」。白いクロスの上に並んだナイフとフォークを使って洋食を食べたことなど、まるでなかった連中なのであった。

グラウンドは石だらけ、選手を一行に並べてまずは石拾いとトンボ掛けから始めた。選手は工場朝8時から4時まで仕事し、パンと牛乳で腹ごしらえをしてからの練習である。

日産という大会社が日本リーグを目指すと宣言してスタートしたのだが、宣言は立派でも、その実際の姿は読売サッカークラブなどとは程遠い、悲しいほどに惨めなものであったに違いない。地方から夢を描いて上京した若い選手から見れば、夢と現実のギャップの大きさはショックであり、話が違うと思うのは当然なことであった。しかし選手にとって話が違うその最たるものは、実は東大サッカー部OBの監督ではなかったか。

今にして思えば、眼鏡をかけた色白の東大出は、サッカーこそ生き甲斐の少年たちからすれば異邦



日産自動車のサッカー部。
前列中央が加茂周監督。
右端が安達

人であり、精神的な異物として受け入れを拒んだ者がいても仕方のないことであった。岩手から採用した男が当時を思い出して言うには「東大出て眼鏡掛けた人がサッカーやるなんて、どうせ大したことなかんべさ、まんずやめとくべ」とか言って笑ったそうだ。むべなるかな！

やがて夏が来たので昔の縁を頼りに検見川で合宿をした。

私は初めて選手といっしょに練習に参加し、たっぷり走りこんでコンディションを整えた。期するところがあったのである。

時が来て、練習試合に満を持して登場、東大LBのプライドをかけて走り、蹴り、抜き去り、パスして活躍した。

試合後の風呂場で聞くとともに聞こえてきたのは、監督、意外にやるじゃねえかよう？ これで精神的異物は彼らの心から消えた。もろもろの混乱は収束に向かい落ち着いた。スポーツとは正直なものである。公式戦ではメンバー不足でやり繰りに苦労することはあったが、試合は順調に勝ち進んだ。2年目には相当レベルの選手が何人か入るようになっていた。

加茂周さんと監督契約

そのころになると、私は会社の仕事はほとんど

しないに等しい状況で、人事部内で「安達にいつまであんなことをやらせておくのか」との声が出始めていたらしい。私は結局は素人監督、ライセンスのない自分の限界は十分に承知していたし、何よりもこのままでは選手が育たない、選手を裏切ることになる、との思いを強く抱くようになってきた。チーム強化のために今後何が必要なのか、どんな手を打つべきなのか、も薄々分かってきた。

幸いなことに日産社内に「会社のサッカー強化の方針はどうやら本物らしい」という空気がじわじわと醸成され始め、チームの一層の強化を期待する雰囲気が出てきたことも手伝い、私は自分の能力の限界と、専門のプロ監督招請の必要性を訴え、会社の理解を得ることに成功した。部が発足して1年半が経ったころである。

そして再び東大LB先輩の門を叩くことになる。私は岡野俊一郎先輩にご指導を仰ぐべく、単身で渋谷の体育協会内にあったサッカー協会に向かった。岡野先輩から長沼健氏、平木隆三氏をご紹介いただき、ずうずうしくもお三方を前に日産サッカー部の現状とサッカー強化の考え方、会社の方針などを説明して協力を仰いだ。「よし分かった。ペラに頼むよ」ということで、平木氏が具体的な相談に乗ってくださった。

「加茂周が今空いているはずだ。ちょうどいい、

電話してみる」「安達さん、周は話を聞いてもいいと言っているが」「それでは今日これからすぐ大阪に伺います」。その日の夕方には私は大阪駅近くにあった加茂ショップで、加茂周氏を前にして日産サッカーの将来の夢を熱く語っていた。

意気投合するのに多言は必要なかった。そのまま加茂氏の自宅に上がりこんで痛飲、また痛飲。「俺はプロの監督で飯を食いたい」「その通り、限界を越えねば。加茂さん、サッカーは美しくあって欲しいね?」「その通り」。こぼれるばかりの楽しい夢を共有して家を辞した。もっとも肝心な具体的な労働条件の話は一言も出さず終いであった。

しばらくして弟の加茂建氏から電話が入った。「建です。兄はお金の方はからっきし駄目で、私が兄の代わりに……」。条件は一般社員契約ではなく、プロ契約にしたい。退職金は要らないし、成績が悪ければいつでも首にしてください、その代り契約金は高くしてほしい。あらましそんな内容であった。

企業選手基盤のプロ

今では当たり前の常識であるが、昭和48年当時の日本の大企業では簡単に理解される考え方ではなかった。自分の持てるあらゆる知恵を総動員して会社を説得し、さんざん苦勞しながらも、ど

うにか契約にこぎつけた。

日本人初（多分）のプロ契約の監督の誕生である。契約書は当時日産の契約レースドライバーであった高橋国光氏の契約書を引っ張り出してきて、それを下地にして私が自分で書いた。

加茂監督とは「5年で日本リーグに上げてくれ」「分かりました、安達さん、やりましょう」ということを約束してくれた。

加茂監督は約束通り5年で日産サッカー部を日本リーグ1部に昇格させ、自ら日本人初のプロ監督に就任しただけでなく、日本人初のプロサッカー選手・木村和司を誕生させた。

文字通り、日産自動車サッカー部を人気、実力とも日本を代表するチームに育て上げてくれた。読売サッカークラブとは全く異なる、企業選手を基盤としたプロサッカーチームを作ることに成功した。

日産自動車サッカー部の新年会は今もってOBが多数集い、盛大に行われている。長谷川健太、井原正巳なども時には参加してくれるし、何よりうれしいのは、かつて私が仲人したOBが何組も夫婦で参加してくれることである。今にして思えば、素人監督のドタバタ経験も無駄ではなかった。東大時代の猛練習もこれまた大いに役に立ったのである。

東大LB、東大サッカー部に感謝！

Jリーグの基礎を作る③東京ガス→F C東京

公益企業からプロ・クラブへ

鳥原光憲（昭和42年卒業）

企業チームの選手、監督。部長として

公益性高い会社で働きたいと思い、1967年4月に東京ガスに入社して以来41年余。ここでサッカーとの関わりがこれほど深くなるとは思っていませんでした。

最初に会社訪問をした際、人事課長に「東京ガスには1935年創部の伝統あるサッカー部があり、日本リーグに次ぐ関東社会人リーグにいる。うちに入ってぜひサッカーをやってくれないか」と誘われ、その場で何となく入社が決まりました。社会人になってサッカーをしようとは全く考えて

いなかったが、実はそのときに東大サッカー部3年先輩の吉田慶次さん（昭和39年卒業）が東京ガスに勤めておられることを知り、運命的なものを感じたこともあったように思う。

こうした経緯から入社後すぐにサッカー部に入り、6年ほど選手として活動し、一応約束を果たしたのだが、それで終わらず、以降監督さらには部長として、サッカーとの関係が続くことになった。この間、特に選手時代には、関東社会人リーグの入れ替え戦で御殿下クラブに敗れて悔しい思いをしたことや、安達二郎先輩（昭和39年卒業）の率いる“新生”日産自動車サッカー部に胸を貸したことなど、社会人サッカーを通じてたくさんの思い出がある。その中で、私にとって一番の思い出は「FC東京」を誕生させたことである。

顧みると、東京ガスサッカー部は90年に全国地域リーグ決勝大会で優勝して、悲願の日本リーグ2部昇格を果たした。日本リーグは、92年のJFL発足、93年のJリーグ発足により発展的に解散したが、このJFLにつながる日本リーグ2部昇格は、まさに画期的なことであった。

これは前掲の吉田慶次氏のサッカー部長時代の功績である。吉田氏は公益事業である東京ガスのサッカー部として種々の制約が多い中で、外国人コーチ・選手や日本人プロ選手の活用を図るなど思い切った強化策を推し進めて、見事に成功させた。そのベースには、サッカーを企業スポーツであると同時に地域貢献に役立つ事業と位置づけ、これを車の両輪にした活動の積み重ねがあったのだ（85年に東京ガス・サッカースクールを開校、サッカー・クリニックも各地域で展開、コーチ・選手たちはこれに積極的に参加）。

昇格後、日本リーグ2部からJFLへと社会人サッカーのトップリーグで3年を経過し、Jリーグ発足の翌年にあたる1994年に、私は吉田氏から将来のJリーグ参入への強い思いとともにサッカー部長を引き継いだ。

Jリーグ参入のための三つの方針

このころ、調布市青年会議所を主体とする「調

布にプロサッカークラブをつくる会」によるJリーグ誘致活動が沸き起り、東京ガスに対して熱心な署名嘆願運動があったが、残念ながらその時点ではまだ体制も十分に整っておらず、時期尚早のため断念せざるを得なかった。こうしたこともあって、以降さらにチームの体制強化を進め、東京ガスのJFLでの成績上位が定着してきた。

しかし一方で、Jリーグ人気が急激に高まる中で、JFLからJリーグに昇格していくクラブも増え、その可能性がない社会人チームの活動維持が困難になりつつあった。

このような状況を背景に、96年にJリーグ理事会でJリーグ2部制移行（99年から）の構想が決定し、それに伴いJ2参加の条件が示され、97年3月にはJ2参加クラブの募集が開始されることになった。そしてこの大きな組織変革を機に、東京にJリーグクラブをと望む声が、地域社会はもとよりサッカー界でもますます強まり、当時の川淵チェアマンからも「東京にJリーグ・クラブを誕生させることが最大の願いだ。できる限り支援するのでぜひともがんばって欲しい」と励まされた。もろもろの情勢から見て、スタッフ・選手たちのためにも、地域社会、サッカー界、ひいては会社のためにも、私はこのチャンスを捉えて、なんとかJリーグ参入を実現させねばという思いを強くした。

だが現実的に考えると、公益事業である東京ガスが単独でJクラブを持つのは困難なことから、まずは目指す方向として「三つの基本方針」（東京都をホームタウンとして企業・地域社会・行政の協力体制により、都民のためのクラブをつくる。運営法人はできるだけ多くの企業や自治体の共同出資とし、特定の企業の影響を受けない、独立性のある組織とする。東京ガスは一出資者として参加し、チームと下部組織を移管するとともに施設面などの協力を全面的に行う）を決めて、それに則ったJリーグ参入の実現に取り組むことについて、経営トップの理解と承認を得た。

「東京フットボールクラブ株式会社」を設立

そして直ちに各方面への協力要請に動き始め、まず東京都から、多摩国体用の「武蔵野の森スタジアム(現・味スタ)」を2000年中に建設してホームスタジアムとして提供し、クラブを全面的にサポートするという約束を取り付け、最初の大きな難関を突破した。

次に、クラブ運営法人の中核企業として、「Jリーグの理念」「三つの基本方針」に賛同してくれた東京電力、日石三菱、清水建設、三菱商事、テレビ東京、ampm、富士銀行と東京ガスの8社(社名は当時)から同一比率での出資を承諾してもらい、東京商工会議所の協力支援も得て、運営法人設立の見通しをつけることができた(エネルギー業界を代表する3社の協力体制も実現でき、現在のFC東京のユニフォームに反映されている)。

これらを踏まえて、97年8月8日のJリーグ参加申請になんとか漕ぎつけ、その後、中核企業8社と東商を中心に他企業・団体の出資参加を募るなど精力的に準備を進め、98年10月1日都民の日に「東京フットボールクラブ株式会社」を設立、99年に始まったJ2に「FC東京」として参画(運よく1年目でJ1昇格を成し遂げ)、やっと長年の念願がかなった。

Jリーグ参入の動きに呼応して、東京ガスサッカー部は97年の天皇杯サッカーで社会人チームとして大活躍をした。3回戦で名古屋グランパスに3-1、4回戦で横浜マリノスに2-1で勝ってベスト8に、準々決勝はベルマーレ平塚に3-2の延長Vゴール勝ち、そして準決勝で鹿島アントラーズに1-3で惜しくも敗れるという快挙だった。また98年には最後のJFLで東京ガスは初優勝を遂げた。チームの活躍が大いに気運を盛り上げたことは確かである。

人生に欠かせない大事な存在

思い返せば、当時の自分の仕事はガスの原料調達を担当する原料部長で、液化天然ガス(LNG)の売買契約交渉などで海外出張も頻繁であったが、その中でもJリーグ参入のために可能な限り時間を振り向けて精いっぱい取り組んだ。使命感もあったが、結局はサッカーが好きだからこそ出来たのだと思う。もちろん、最初の段階から行動を共にした村林裕氏(現FC東京社長)をはじめ、さまざまな関係者の苦勞を決して忘れることはできない。

今年(2008年)、FC東京は創立10周年(J1で9シーズン目)を迎えた。まだ歴史は浅く、リーグ優勝の経験もないが、各世代の日本代表選手が育ち、ユース、ジュニアユースなどの下部組織も充実し、サッカーを通じた地域振興に地道に取り組み、ファン層も着実に拡がりつつある。また株主数は都民のクラブにふさわしく、311社・25団体までに増加し、数多くのスポンサーの支援を得て、安定的な事業基盤を築きつつある。

私は現在FC東京の運営に直接関与はしていないが、中核企業の一員であり、FC東京に多数の東京ガス社員を出向させている関係などから、特別の予定が重ならない限りホームゲームには必ず行き、株主・スポンサー各社の仲間と一緒に頑張って応援をしている。FC東京は今や自分の人生に欠かせない大事な存在となっており、将来、日本を代表するようなビッグクラブに発展していくことを心底願っている。

FC東京の誕生に関わられた運の巡り合わせに感謝するとともに、小石川高校でボールを蹴り始め、伝統ある東大ア式蹴球部で貴重な経験を積んで以来、続いているサッカーとの「縁」をこれからも大切にしたいとつくづく思う。